

## プログラム

**ゴンサロ・デ・バエナ** (16世紀)

《新奏法曲集》(リスボン 1540)より:

1. <クルチフィクス> (ロイゼ・コンペール)
2. <星々のやさしい造り主よ> (作者不詳)
3. <ベネディクトゥス> (ヨハネス・オケゲム)

**ジョヴァンニ・ジャコモ・ガストルディ** (1556-1622)

《2声曲集》第1巻(ミラノ 1598)より:

4. <幻想曲> 第6番、第5番

**ピエトロ・アントニオ・ロカテッリ** (1695-1764)

《フルート・ソナタ集》(メキシコ、1759)より:

5. ソナタ 第10番 <メヌエット>

**ジャン=フィリップ・ラモー** (1683-1764)

《優雅なインドの国々》(パリ 1735)より:

6. <アフリカ奴隷のエール>

**作者不詳** (1799)

7. メヌエット <ラ・アマブレ>

(ブエノスアイレス国立公文書館 奴隷文書)

**バルタサル・マルティヌス・コンパニオン** (1735-1797)

8. <エル・コンゴ> (ペルーのトルヒーリョ 1779-89、マドリッド王宮図書館 手稿譜)

**ミシェル・ブラヴェ** (1700-1768)

《小曲集》第1-3集(パリ 1750頃)より:

- A. C. デトゥーシュ (1672-1749) バレエ《イセ》の  
9. プロローグ <美しいところ>
10. イセのエール <じっとしていても愛を求め>
11. エール <クリメーヌを失って>

**ウィリアム・ハミルトン・バード** (1780-1800活躍)

《東方雑集、ヒンドゥーの歌》(コルカタ 1789)より:

12. <ああ、妖精の顔>
13. <さあおいで、愛しの君!>

**A. コレツリ** (1653-1713) - **T. フォレスト** (1729-1802頃)

14. マレーの歌 <そよ風はさわやか> (編曲: P. ボネット  
《カルカッタからメルゲイ諸島の航海》ロンドン 1990)

## 日本の歌二曲\*

15. <サン・ジュアンさまの歌> (隠れキリシタンの歌、片岡弥吉により収録、20世紀)

16. <さくら> (ゴードン・サンダース《8つの日本の伝統曲》ロンドン 1979)

\* 賛助出演: 津上弘道 (琴古流尺八)

**ヤコブ・ファン・エイク** (1590頃-1657)

《笛の楽園》(アムテルダム 1646)より:

17. <戦い>

**ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル** (1685-1759)

《クレイ氏の音楽時計のための小品集》より:

18. <エール> HWV 587

19. <アレグロ> HWV 473

オペラ《シピオーネ》より 20. <嵐の海で> HWV 597

21. <ヴォランタリーまたは天使の飛行> HWV 600

22. <エール、アレグロ> HWV 594

(大英図書館 手稿譜 ロンドン 1732-1738頃)

## 楽器

過渡期リコーダー(16-17世紀) ソプラノC管、

コントラルトG管、テナーC管、バリトンG管

バッコリコーダー(18世紀) ソプラニーノ、ソプラノ、

コントラルトF管、テナーD管、テナーC管、バスF管

明治元年の 1868 年に始まったスペインと日本の外交関係、本年はその樹立 150 周年を祝う節目の年です。しかしながら、日出づる国とスペインおよびポルトガルとの関係はそれ以前に遡ります。ヨーロッパの西南端イベリア半島を占める両国は 1580 年から 1640 年までの間、同じ国王により支配されていました。1543 年に、台風のためポルトガルの商人たちが種子島に漂着し、初めて日本にヨーロッパ人が渡来しました。南方からやって来た外国人は「南蛮」と呼ばれ、また彼らとの交流を反映した芸術も同じく「南蛮」と呼ばれました。その交流は、島原の乱(1637 年)の後、鎖国令が発せられるまで、一世紀あまり続きました。鎖国から明治時代に至るまで、西洋との唯一の接点は、長崎の人工島・出島で例外的に活動を認められたオランダ商館のみとなりました。

「南蛮音楽」と題するこのプログラムは、15 世紀末以降スペイン人とポルトガル人が発見した東方航路に関わりのある楽曲を紹介します。マドリッドでスペイン王兼ポルトガル王に、ローマで法王に謁見するために日本から派遣された二つの使節団も同じ海路を辿りました。天正遣欧使節(1582-1590)と慶長遣欧使節(1613-1620)には、イエズス会を始めとする諸会派の活発な存在がありました。その目的はキリスト教の布教で、イエズス会創設者の聖フランシスコ・ザビエルは 1549 年から 1551 年まで日本に在住しました。当初は布教が容認されていましたが、徳川幕府はこれを許さず、1639 年に鎖国されました。

スペイン人バエナの作品は1540年にリスボンで発表されました。当時のポルトガル航路は、同地から日本に向かうルートで、天正遣欧使節も同じルートを逆航路で辿りました。この海路は大西洋を南に向かい、アフリカ最南端の喜望峰を周り、インド洋を渡り、さらに東方へ向かった後、マラッカ海峡からシナ海に入って、要衝のマカオがある中国大陸にたどりつきました。

マドリッド近郊エル・エスコリアルでスペイン国王を訪問した後、ローマへ向かう途中、天正使節はマントヴァ公国で歓待を受けます。ガストルディはこの宮廷に仕えた主要な音楽家です。イタリア人口カテッリの楽曲は 1759 年のメキシコの手稿譜によります。ヌエバ・エスパーニャの首都であったメキシコ・シティはスペインルートを中心であり、第二の使節団、慶長遣欧使節がヨーロッパへ向かう経路地でした。船団はスペイン南部アンダルシアの沿岸から西へ、大西洋を渡りアメリカ大陸に向かいました。アメリカ大陸に着くと陸路で移動、その後アカプルコからフィリピン諸島のマニラまで太平洋を横断しました。マニラは東方でのスペインの拠点であり、日本との交流の基地でもありました。

ラモーと作者不詳（モンテビデオ港での女奴隷の解放を歌った〈ラ・アマブレ〉）およびコンパニョンの作品は、この航路でアフリカ沿岸からアメリカへ労働力として強制移動させられた奴隷の痛ましいドラマに結びついています。ブラヴェによってリコーダー二重奏に編曲された諸楽曲の作者であるデトゥーシュは、フランス国王ルイ14世がシャムのナーラーイ王に派遣した使節と共に 1686 年にタイを訪れました。当時、インド半島東岸のポンディシェリに、フランスは同国のインド会社の主要拠点の一つを置いていました。

ウィリアム・ハミルトン・バードは英国の音楽家で、土地の音楽家たちとインドの民衆音楽を収録し、イギリス人統治者ウォーレン・ヘイスティングスへの献辞を添えて現コルカタで発表しました。当時、ベンガル・アジア協会が設立され、また古典言語としてサンسكريットが学ばれ始めました。〈そよ風はさわやか Angin be dingin〉は、マレーの歌の題ですが、イギリス東インド会社の船長トーマス・フォレストがスマトラ北部アチェのスルタンの前で披露するために、1784 年にアルカンジェロ・コレッリの旋律に編曲したものです。同船長はミンダナオの王とデュオでメヌエットをよく演奏していたそうです。

賛美歌〈サン・ジュアンさまの歌〉は、日本のキリシタンに引き継がれたもので、キリスト教徒の殉教を扱い、その起源はイベリア半島からの布教の時代に遡ります。一方、〈さくら〉は日本の伝統的な歌で、桜が咲く春に思いを寄せます。ファン・エイクの〈戦い〉は戦闘が展開される様子を描写する器楽曲です。オランダがスペイン王国から独立する 2 年前、1646 年にアムステルダムで発表されました。島原の乱で勝利をあげ、日本からイベリア半島人を追放することに手を貸したオランダ砲兵隊を象徴するものともいえます。

1730 年代、ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデルが時計師チャールズ・クレイとロンドンで協力し、吹奏管を鳴らす仕掛けを作動させる音楽時計に音楽をつけ、それが東洋に輸出されました。中国では「シンソン（ツインツォン）」として知られ、北京の故宮コレクションに「アポロ神殿」として知られる時計が保存されています。本日のプログラムの最後にその時計が奏でるいくつかの旋律をご紹介します。



### ラ・フォリア (La Folia) ソリストによるデュオ

ペドロ・ボネとベレン・ゴンサレス・カスターニョは、バロック・アンサンブル「ラ・フォリア」所属のソリスト。1977 年創立以来ペドロ・ボネが主宰するラ・フォリアは、数多くの CD をリリースし、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカおよびアジアの40カ国以上でコンサートを開催、また重要な国際音楽祭でバロック楽器のための現代音楽の初演も多く手がけています。

デュオ形式では、バスを除いた二つのリコーダーのためのバロック音楽の多彩な曲目を数多く演奏するほか、リコーダー独奏またはリコーダーとバスのための作品紹介、同様に中世およびルネッサンス期の対位法的な音楽技法による二重唱用の作品も披露します。今回の演奏のために、16 世紀から 18 世紀にかけての歴史的な楽器を複製した異なるタイプと音域のリコーダーの数々を用意しており、その変化に富んだ響きに耳を傾けることがコンサートの魅力の一つともなっています。ラ・フォリアは、「ラ・ナオ・デ・チーナ」（極東へのスペインルート of 音楽）の CD を録音し、同作品は数々の国際演奏ツアーで演奏されています。

ペドロ・ボネは、マドリード王立高等音楽院のリコーダー名誉教授およびマドリード・レイ・ファン・カルロス大学芸術・人文学博士。ベレン・ゴンサレス・カスターニョはカタリーナ・グルスカ高等音楽院のレパートリー教授であると同時に、リコーダー奏者としての活動とピアノを両立させ、ラ・フォリアと共に多くのコンサートツアーに参加、また CD の録音もしています。

表紙：日本でのイエズス会宣教師たちを描いた「都の南蛮寺図」（狩野宗秀筆、16 世紀後半、神戸市立博物館所蔵）



## 南蛮音楽

～イベリア半島から日本への音楽の旅～

「ラ・フォリア」ソリストによるデュオ

ペドロ・ボネ

(リコーダー奏者)

ベレン・ゴンサレス・カスターニョ

(リコーダー奏者)

2018年5月15日 (火)

聖フィリッポ教会

(〒850-0051 長崎市西坂町7-8)

コンサート 19:00開演



京都府立芸術大学  
KYOTO COLLEGE Kyoto City University of Arts

日本二十六聖人記念館 長崎スペイン世界友の会

